

# みみタロウ

日本語版 ☆115号 2015年12月

滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」  
大津市におの浜 1-1-20 ビアザ淡海 2F  
Tel/Fax : 077-523-5646  
E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp  
URL : http://www.s-i-a.or.jp  
Facebook : https://www.facebook.com/siabiwako

わたし はんせい き

## 私の半生記

今回みみタロウは、膳所カトリック教会フィリピンコミュニティのリーダー、芥藤アニさん(大津市在住)にお会いし、お話をうかがいました。



33年前、フィリピンでOLをしていた私は、日本から遊びに来ていた主人と知り合い、電話でつきあっただけで思い切って結婚。その1年後、妊娠7ヶ月のお腹を抱

え、日本のことは何も知らずにこの国にやってきました。まだ日本では、そして特に滋賀では、フィリピン人はもちろん、外国人もめずらしかった頃の話です。言葉も通じず、病院食も食べられず、心細い思いをしながら来日後すぐに出産。ですが寂しいと思う間もなく次々と4人の子どもに恵まれ、子育てに追われながら過ごしました。日本語教室に通う間もなかったの、日本語はテレビで学習。好きな時代劇では古い言葉が辞書になくて苦労したり、毎日の料理番組では日本語と一緒に日本料理も学びました。そのうち近所に日本人の友達もでき、みそ汁の作り方も教えてもらって、そのおいしさに感動。みそ汁を作る度に嬉しくてお隣にお裾分けしていたことは、今となっては笑い話です。

子ども達は日本語で普通に日本人として育てました。ただ、朝の掃除、料理、自分の下着の洗濯などはフィリピン方式できちんとしつけました。そしてフィリピンと日本のどちらの親戚も同じように大切にしておいてね。「心にはいつも日本とフィリピンのいとこを入れておいてね。でないとお母さんは悲しくなるよ」といつも言い聞かせていました。

子どもたちはみな元気に育っていましたが、我が家に大事件が起きたのは、一番下の娘が10歳の時のこと。フィリピンには幼児の頃行っただけで、タガログ語も英語も教えていなかったのに、何故か急にあちらの学校に行きたいと言いつけました。聞き流していたところ、学期末に先生から「フィリピンに転校すると聞きましたが」と話があっけびつくり。娘が英語をマスターしたくて転校を本気で考えていることを知りました。それで娘をフィリピンに連れて行って学校の見学をし、その決意が固いことを知り、思い切って妹の所から通学させることにしました。周りからは、「何故フィリピンの

学校に」と言われたりもしましたが、それが本人の夢なら実現させてやりたいと思ったのです。実際には、まだ幼いのに家族と離れ、言葉も習慣もわからない所に行かせることはとても心配でした。そしてその大変さは、誰にもまして私がよくわかっています。してやれることは電話をかけることぐらい。当時は航空運賃も高く、一年一度くらいしか会えません。でもその心配をよそに、娘は帰りたとも言わずに、英語もタガログ語も上達し、勉強も頑張っていました。そして、そんな様子を見ていた3番目の娘も中学校終了後、妹の後を追ってフィリピンの高校へ行ったのです。二人とも愚痴の一つも言わなかったけれど、随分苦労したと思います。娘たちはフィリピンの大学に進学し、卒業後は、下の娘は帰国。その上の娘はフィリピンに住んでいます。

日本育ちの子どもたちも合わせ四人とも立派に成人した今、ゴルフのキャディーをして主人と必死で働いたこと、毎日のお弁当を欠かさず作ったことなど子育ての苦労もなつかしい思い出となり、大きな喜びとなって私に帰ってきています。子どもたちもきっと親の一生懸命な姿を見て、真面目に育ってくれたのだと思うのです。今では子どもたちにそれぞれパートナーができ、おばあちゃんや孫も合わせて我が家は大家族となりました。それに最近では、フィリピンの同胞たちも周りに増え、私は相談にのったり、日本料理を教えてあげたりと我が家はいつもにぎやかです。一方、あの時の子どもたちの冒険のお陰で、祖国との絆も途絶えることなく、より太くなったようです。二人の子ども達とは離れて暮らしていましたが、逆のパターンで私と同じ体験をしたことで深く理解し合えますし、タガログ語で話し合えるようにもなりました。また、日本育ちの子どももフィリピンにいる妹を訪ねる機会が増え、タガログ語の勉強を始めたんですよ。そして私が何より幸せだと思うのは、こうして日本人もフィリピン人も関係なく、家族も友達もみんな笑顔で仲良く暮らせること。これは全て、どの人も温かく受け入れてくれる夫の大きな心のおかげです。お父さん、本当にありがとう！